

《書評》

惣谷 美智子・岩上 はる子 編

『めぐりあうテキストたち——ブロンテ文学の遺産と影響』（春風社、2019年）

Meguriau tekusuto tachi: Buronte bungaku no isan to eikyō (Texts that Encounter: Legacy and Influence of Brontë Sisters). Edited by Iwakami Haruko and Sōya Michiko. Shunpūsha, 2019.

シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-1855）の『ジェイン・エア』（1847）やエミリー・ブロンテ（Emily Brontë, 1818-1848）の『嵐が丘』（1847）に親しみを覚える読者は多いのではないだろうか。両作品は複数回にわたり映画化され、世界中で舞台上演されるなかで、いまや時代、国、世代を超えたファン層を獲得している。

『めぐりあうテキストたち——ブロンテ文学の遺産と影響』は、ブロンテ姉妹の「作品が自由自在に読み直され語り直されて新たな作品が生み出されているという現在の状況のなかで、ブロンテ文学の遺産と影響をさまざまな作品のなかに見いだし新たな読みを提示する」ために編まれた（7）。イギリス文学研究を中心とする20名の執筆者たちが、時代や言語にとらわれず、ブロンテ文学に触発された文学、映画、演劇といった二次創作について論じ、「ブロンテ文学の遺産と影響」の特性と多様性を浮かび上がらせていく。

『ジェンダー研究21』掲載の本書評では、各章を網羅的に紹介するよりもむしろ、ジェンダーやフェミニズムという視座により本書を整理するというアプローチをとりたい。編著者が述べるように、『めぐりあうテキストたち』がとりあげる作家・作品は、執筆者からの推薦により選出されており、ジェンダー

やフェミニズムという主題は必ずしも全ての論考に共通するわけではない。とはいえ、ブロンテ文学には、ヴィクトリア朝という公的領域と私的領域とが明確に峻別される家父長制時代において、女性が職業を持ち自己表現をすること——すなわちブロンテ姉妹のように作家・芸術家であること——をめぐる葛藤が物語られている。したがって、ブロンテ姉妹の作品がいかに他の作家たちにより翻案されてきたのかを探る試みのうちには、必然的にジェンダー規範がいかに読み直され、語り直されてきたのかという問いも含まれることになるだろう。事実、本書にはジェンダーやフェミニズムを切り口とした論考も数多く収録され、それぞれの議論がめぐりあい、互いに響きあいながら、ブロンテ作品を中心とするフェミニズム文学批評の伝統および時代的・空間的な広がりを再考する機会を与えてくれる。本書評では、本書の構成について紹介した後、ジェンダーやフェミニズムをめぐる論点を概括していきたい。

1. 本書の構成

岩上はる子氏の「はしがき」によれば、第Ⅰ部「呼応する」では、「ブロンテたちと同時代を生きた作家たち」として、チャールズ・ディケンズ、ジョージ・エリオット、ジュズベリー姉妹、シャーロット・ブロンテの親友メアリ・テイラーといったイギリス人作家に加え、アメリカ人作家ルイザ・メイ・オルコットが(7)、第Ⅱ部「語り直す」では、「ブロンテを明確に意識して」執筆した次世代以降の作家たちとして(8)、ヘンリー・ジェイムズ、ダフネ・デュ・モーリア、ジーン・リース、エマ・テナント、アニータ・ブルックナーが論じられる。

第Ⅲ部「響き合う」では、「対応関係を意識的に作り上げたという確証をテキストから割り出すことはできないが、無意識のうちに再生していたかもしれない」作家としてD・H・ロレンス、イーヴリン・ウォー、アイリス・マードック、カズオ・イシグロが(9)、第Ⅳ部「変奏する」では、ときに「言語やメ

ディアを横断」するアダプテーション作品が取り上げられる(10)。『嵐が丘』を日本語にて上演した河野多恵子、日本語版『嵐が丘』ともいえる『本格小説』を執筆した水村美苗に加え、ラフカディオ・ハーンや樋口一葉についての章もある。ブロンテ文学の影響と遺産が、時代的にはヴィクトリア朝時代から現代まで、地理的にはイギリス、アメリカ、カリブ海地域、そして日本へと広がっていくことを体感できる構成となっている。

2. ジェンダーやフェミニズムに関連する章の紹介

本書の第Ⅰ部と第Ⅱ部はとくに、ジェンダーやフェミニズムをめぐる主題を色濃く提示している。第2章「ジュズベリー姉妹 『シャーリー』と『異母姉妹』——『コリンナ』へのオマージュ」(皆本智美論文)では、ヴィクトリア朝時代のイギリスにおける「女性というジェンダーと職業としての文学の問題」が扱われる(35)。著者によれば「一九世紀初期のイギリスはすでにフランス革命の反動で保守化し、公的領域と私的領域の区分に対応する性別役割分業が強化される傾向にあった」(35)。このような時代背景において、フランス革命期の作家であるスタール夫人の『コリンナ——美しきイタリアの物語』(1807)に影響されつつ、シャーロット・ブロンテおよびジェラルディーン・ジュズベリーの作品が「表現豊かなヨーロッパ大陸女性と憤み深い英国女性」を対比させることは注目に値する(35)。異国性を付与され職業により自己表現をすることのできるヒロインと、自己抑制を美德とするがゆえに家庭領域を選び取るイギリス人ヒロインとの対比は、西洋諸国の中でもイギリスの家長制規範がとりわけ強固だったことを物語る。理想の女性像(感情を抑制する家庭の天使)と、イギリス的な女性性からは逸脱した女性像(自己表現をする職業人)という二項対立が強化される過程において、「女性作家と女優という二つの職業は、内面の表現を要求されるという点」で「自己の最奥を不特定多数の異性にさらす」娼婦を連想させることもあったという(40-41)。

このような時代において、女性が作家という職業を持つことは、現代読者の想像を絶する困難な営みだったにちがいない。とはいえ、女性作家たちは苦境を単に嘆いていたわけではない。続く章が論じるように、家父長制へと異議申し立てをし、社会変革に向けられたシスターフッドの必要性を説き、女性の戦略的な自己演出の在り方を描く作家も存在していた。ここに文学的フェミニズムの萌芽を見出すこともできる。

第3章「メアリ・テイラー 『シャーリー』と『ミス・マイルズ』——女のエンパワーメントとフェミニズムの言葉」(大田美和論文)は、「恋愛と結婚の物語」という保守性に収束するシャーロット・ブロンテの小説『シャーリー』(1849)と、女性性の規範を逸脱するも「仕事を通して生きる力を獲得する女性たち」を描くメアリ・テイラーによる『ミス・マイルズ——六〇年前のヨークシャーの物語』(1890)を比較考察する(53)。これまで、テイラーの『ミス・マイルズ』は芸術的完成度においては『シャーリー』に劣るとされてきたが、本章は『ミス・マイルズ』をフェミニスト小説として再評価する。職業人テイラーによる本小説が、女性登場人物たちに「フェミニズムの言葉」を与え、「ジェンダー規範や異性愛規範に対する批判」、女性がビジネスや法律を学ぶことを阻む「女子教育への批判」、女性への「虐待や監禁」と結びつくゴシック小説という文学ジャンルへの批判といった主題を前景化していることが論じられる(63)。

第5章「ルイザ・メイ・オルコット 憧れの作家シャーロット・ブロンテ——『ジェイン・エア』の影響と変容」(木村晶子論文)は、アメリカ人作家ルイザ・メイ・オルコットによる『ジェイン・エア』のパロディとも解釈できる「仮面の陰で——あるいは女の力」(1866)および、「女性の職業による自立の可能性と限界」(95)を探求し、「女性の連帯を重視するフェミニスト的結末」(96)を持つ『仕事——ある体験の物語』(1873)を考察する。2章が論じる通り、ヴィクトリア朝時代において女優という職業は、家庭的な女性像からの逸脱を意味していた。この文脈において「仮面の陰で」の主人公ジーン・ミ

ューアが、「演劇的自我」を家父長制社会において生存するための戦略として意図的に利用していることは興味深い。ジーンは30歳を超える元女優だが、19歳の「貧しく孤独なガヴァネス」の仮面をかぶり演技をすることで、裕福な男性と結婚し階級上昇を果たす(92)。本章によれば、ジーンの演劇性は「当時の〈家庭の天使〉の理想像こそが家父長制の産物であり、等身大の女性とは異なる不自然な偽装であることあぶりだす」だけではない(92)。ジーンには「打算的な悪女像とは異なるまじめな実像があるわけではなく、そもそも虚像と実像という境界自体が存在しない変幻自在の演劇的自我があるばかり」であり(94)、このような「演劇的自我」が、「本質的、固定的な自我のとらえ方や二項対立的ジェンダー区分を否定する、現代のクイア理論を先取りし」、「パフォーマンスなジェンダー・アイデンティティに対する作者の意識を示している」可能性が論じられる(94)。

第I部は、シャーロット・ブロンテの作品が、一方では家父長制へと反発しながらも、他方では家父長制的な家族・結婚制度へと傾倒する保守性を持つことを明らかにしている。テイラーやオルコットは同時代において、シャーロット作品の保守性にフェミニズムの視点から応答しているともいえるが、この傾向は次世代以降の作家たちにも顕著である。第7章「ジーン・リース『ジェイン・エア』と『サルガッソーの広い海』——太陽の国の迷い子たち」(市川薫論文)は、西インド諸島出身のジーン・リースによる『サルガッソーの広い海』(1966)を分析する。本作は、『ジェイン・エア』においては狂女として描かれるバーサを主人公として語りなおされた物語だ。原作においてバーサは西インド諸島のクレオールの家系に生まれ、イギリス人のロチェスターと結婚するも、狂気ゆえに屋敷の奥深くに監禁されている。これに対し、『サルガッソーの広い海』は、イギリス人のジェインとクレオールのバーサを互いの分身として描きだす。本作は、ジェインが体現する「家庭の天使」が抑圧せざるをえなかった怒りが、「狂女」バーサにより象徴的に表現されていることを論じた初期フェミニズム文学批評の洞察を、小説形式において先取りしているのであ

る。

第8章「ダフネ・デュ・モーリア 『ジェイン・エア』と『レベッカ』——陰画の奥に秘匿されるもの」(岩上はる子論文)は、通俗的なロマンス作家として過小評価されてきたデュ・モーリアによる『レベッカ』(1938)を、「ブロンテの時代には描くことのできなかつたタブーの世界」(140)を浮かび上がらせる『ジェイン・エア』の「陰画」と位置づける。『レベッカ』は登場人物たちに原作とは異なる性格を与える。ジェイン役である主人公には「ジェインのような女性の自己主張や自立への願望」(140)が欠如し、バーサ役の先妻レベッカは小説においては既に死んでいるが、「家庭の天使」という「女の領分」にとどまることを拒否する主体性の持ち主として回想され(147)、ロチェスター役のマキシムは先妻レベッカの殺人者として登場する。「陰画」として、『レベッカ』は原作を彩る女性の自立という主題を、不穏で愛なき結婚生活に潜む「男女の心理的な支配・被支配関係」(152)という主題として再提示し、愛や結婚を理想化してきたロマンスジャンルの規範へと挑戦する。

第9章「アニータ・ブルックナー 『秋のホテル』にみる現代女性の苦悩——ロチェスター不在の『ジェイン・エア』を読む」(小田夕香理論文)では、『秋のホテル』(1984)を、「〈幸せな結末〉に囚われない等身大の生き方があるのだという、現代女性に開かれた新しい価値観を自ら発信する」(169)、現代版『ジェイン・エア』として再読する。結婚により幸せを手に入れるジェインとは対照的に、ブルックナーにより創作されたジェインともいえるイーディスは、1980年代に女性作家として自立する一方で、孤独に耐え切れず家庭を切望する。イーディスを通じて「過去の価値観には収まらない」現代女性にとって「芸術家として生きることが何を意味するのかを」問い直す(170)。

第10章「エマ・テナント テクストの戯れが問う女性の幸福——アデルの成長物語を軸として」(木梨由利論文)は、フェミニズム作家としてヴィクトリア朝小説の翻案をいくつも手掛けてきたエマ・テナントの『アデル』(2002)を取り上げる。これは『ジェイン・エア』においてはロチェスターの

私生児であったアデルの視点を中心とした翻案で、ロチェスターとジェインの結婚を神聖化する原作とは異なり、両者の結婚をより現実的かつ危うい雰囲気¹で描きながら、原作が提示する幸せな結婚という理想を覆す。

ここまでまとめてきたように、次世代以降の作家による『ジェイン・エア』の翻案は、原作の登場人物に新たな声と物語を与えることで、原作に宿る家父長制規範を暴き出し、それに批判的に応答するという共通点を持つ。この過程において、家庭の天使、真の女性性、幸せな結婚やロマンスといった原作を司る理想像が、フェミニスト的な視点から書き換えられていくのである。

3. 『めぐりあうテキストたち』の意義——フェミニズム文学批評として

最後に、本書がフェミニズム文学批評の伝統において持つ意義を三点指摘し、本書評を結びたい。一点目は家父長制の制度的・構造的側面に光を当てていること、二点目は男性中心主義的な²間テキスト性³および文学史の伝統を問い直していること、三点目はブロンテ作品をめぐるフェミニズム文学批評を現代的な視点から更新していることである。

本書の各論考は、ブロンテ作品に派生する文学作品が、家父長制の制度的・構造的側面に光を当ててきた歴史を詳らかにしている。このような分析の方法論は、サンドラ・M・ギルバートとスーザン・ゲーバーによる『屋根裏の狂女』(1979)等に始まる英米フェミニズム文学批評の伝統を踏襲するものだろう。『屋根裏の狂女』は、ブロンテ姉妹の作品をはじめとする女性作家の作品を分析し、家父長制下においては異なる種類の女性とされてきた「家庭の天使」と「狂女」(広義には職業を持つ女性を含む)が、実際には峻別されえぬ女性の両面であることを論じた。『めぐりあうテキストたち』の論考の多くは、このような初期のフェミニズム文学批評の方法論を継承しつつ、家父長制が時代や地域を超えて構築してきた性役割分業や女性性の規範をあぶりだすとともに、家父長制へと抵抗をしてきた女性作家たちの存在に光を当てる。

『めぐりあうテキストたち』が、文学研究分野における家父長制ともいえる、男性中心主義的な文学史およびインター・テクスチュアリティ間テキスト性研究を問い直すというフェミニズム文学批評のプロジェクトを継承していることも重要である。『屋根裏の狂女』は、ハロルド・ブルームの『影響の不安』（1973）が、フロイトのエディプス・コンプレックスを援用しつつ、作家同士の影響関係をもっぱら父と息子の関係として、すなわち男性作家間の関係として想定していることの限界を指摘した。男性作家同士のインター・テクスチュアリティ間テキスト性に焦点を当てる英米文学史においては、当然ながら女性作家同士の影響関係については無視されてきたのである。

『屋根裏の狂女』をはじめとする初期フェミニズム批評は、上記のような男性中心的な文学史に対し、女性作家同士の影響関係に光を当てるオルタナティブな文学史を構築する試みだった。女性作家たちが、家父長制へと反抗した女性作家の先例を探し、女性作家同士の関係性を構築しようとしていたことが論じられたのである。『めぐりあうテキストたち』もまた、ブロンテ文学へと応答する数多くの女性作家たちの作品をネットワーク化しながら、女性作家たちが育んできたインター・テクスチュアリティ間テキスト性を可視化させ、既存の文学史を拡張しているのである。

むろん、『めぐりあうテキストたち』は、およそ40年前に出版された『屋根裏の狂女』（1979）の論点をただ反復しているわけではなく、現代的な視点から更新してもいる。『屋根裏の狂女』をはじめとする初期フェミニズム文学批評は、1990年代以降、ブラック・フェミニストおよび第三世界出身のフェミニストにより、白人女性中心主義であると批判された。この流れの中で、ギャトリ・スピヴァクが、フェミニズムとポストコロニアリズムとを交差させ『ジェイン・エア』を論じたことはよく知られているだろう。『めぐりあうテキストたち』が、白人女性作家だけではなく、西インド諸島出身のジーン・リース、河野多恵子や水村美苗という日本人作家、さらに、ブロンテ作品を帝大講義にて紹介したラフカディオ・ハーンや、日本における家父長制を描き出した樋口一葉にも焦点を当てていることは大きな意義があると感じる。白人女性中心主

義を超えた、複数形のフェミニズムの在り方や分断を超えたシスターフッドの（不）可能性が模索されるいま、日本人研究者による脱領域的なフェミニズム文学批評が、同研究分野を多様化させ豊穡化させていくこともできるのではないだろうか。

1990年代以降のポスト構造主義および脱構築批評が台頭するなかで、『屋根裏の狂女』は、女性性を固定化された本質とみなす傾向があるとも批判された。シャーロット・ブロンテ作品が如実に描き出しているように、19世紀に家父長制への異議申し立てを行うにあたり、女性の美德を生まれ持った本質として捉えるアイデンティティ・ポリティックスが有効であったことは確かだろう。一方で1990年代以降、脱構築およびクィア理論の成熟により、女性性を自明のカテゴリーとみなすフェミニズム批評が更新を迫られていることもまた確かである。このような批評的文脈において、オルコット作品にパフォーマティヴなジェンダー・アイデンティティを見いだす5章や、「みずからの男性性を抑圧するという、複雑で多面的な性的アイデンティティの問題を抱えていた」(145)デュ・モーリアの一面を紹介する8章を含む本書は、ブロンテ作品を中心とするフェミニズム批評を、クィア批評やセクシュアリティの観点からも、さらに更新し、深化させる可能性があることを示唆している。

20本の論考が繋がり、時代、言語、メディアを超えたブロンテ作品の遺産と影響が探られる『めぐりあうテキストたち』は、ブロンテ文学の遺産と影響の拡がりを知るうえでも、ブロンテ文学を起点とするフェミニスト文学批評の伝統と未来を知るうえでも、非常に意義深い研究書である。